

# 『新古今和歌集』における夢の一考察

村松正明\*

## 目次

1. はじめに
2. 戀歌
3. 四季の歌
4. 雑歌
5. 哀傷歌
6. 釋教歌・神祇歌
7. おわりに

## 1. はじめに

古代人は夢による神や仏のお告げを求め、また夢の予言を信じて未來を占ったりした。『記紀』を見ると、夢は神と人が交信する回路であって、公的かつ神聖なものであったことが分かる。だが『万葉集』から中古の『古今集』、そして中世の『新古今集』へと時代が推移するにつれて、夢の神秘性は特に和歌の世界において徐々に薄れていったと言えよう<sup>1)</sup>。大岡信氏は『『夢』は一方では『泡沫のごとき現實』を意味し、他方では『現實を超えた永遠的な神秘の世界』を意味する、不思議な魅力をもった多義性の言葉となった。『夢』の語の多義性は、まさに多義的であることによって、宗教的であると同時に美的であるところの無常觀にひたされた、日本人の人生觀を言い表すのに最も適した言葉のひとつとなった<sup>2)</sup>と述べている。

八代集を通觀すると、夢の歌は『拾遺集』以降一時衰退したものの、それが『千載集』に於いて復活を果たしたと言えよう。それは撰者である俊成によって實踐された「本歌取」の技法が發達したからであり、本歌を意識しつつ掛詞や縁語などを驅使しながら、より複雑な世界を詠みあげた歌が多數入集している<sup>3)</sup>。また雑歌の夢は『千載集』以降急増しており、釋教歌や羈旅歌

\* 鮮文大學校 日語日文學科、副教授、日本古典文學

1) 西郷信綱氏は夢の神秘性が信じられた下限を鎌倉初期としている。(『古代人と夢』平凡社、1972)

2) 大岡信「夢のうたの系譜」(『國文學』學燈社、1970.3) p.46

の夢も『千載集』から入集している4)。

八代集の掉尾をかざった『新古今集』には79首の夢の歌が入集しており、八代集の中で最も数が多く、かつ4.0%と、夢の歌の比率も最も高い。部立別に見ると、戀歌(29首、37%)において一步後退した反面、四季の歌(18首、23%)に多数進出しており、また神祇歌に初めて夢の歌が入集した。歌人としては、慈円が92首のうち7首、俊成女が29首のうち6首、式子内親王が49首のうち5首、家隆が43首のうち4首、良経が79首のうち4首と、夢の歌が多く入集している反面、72首も入集した俊成や、34首入集した後鳥羽院には夢の歌が1首もない。

	總數	比率	春	夏	秋	冬	戀	雜	哀傷	羈旅	釋教	神祇	その他
古今	34	3.1%	1				26	3	3				1
後撰	36	2.5%	1	3	1		25	1	5				
拾遺	24	1.8%					16		3				5
後拾遺	17	1.4%	2				7	4	4				
金葉	12	1.7%			1		7	4					
詞花	6	1.4%		1			3	2					
千載	40	3.1%	1	2		2	13	12	3	3	4		
新古今	79	4.0%	4	4	5	5	29	13	8	6	3	2	

# 比率は總収録歌に對する夢の歌の比率をいう。

『新古今集』の夢に關する考察は、鹿内和子氏、久保田淳氏、今井正氏や渡辺裕美子氏などの考察があるが、何れも歌集の一部分の考察にとどまっており、歌集全体にわたる考察とはなっていない5)。そこで本稿は『新古今集』に入集した夢の歌全体の考察を目的とし、夢の歌を、戀歌、四季の歌、雜歌、哀傷歌、釋教歌・神祇歌と、部立によって五つに分け、それぞれの歌の特徴や時代背景などに注目しながら考察しようと思う。テキストは新日本古典文學大系(岩波書店)を用いた。

3) テキストとして用いた新日本古典文學大系(岩波書店)では、夢の歌79首のうち、1首の本歌をあげている歌が20首、2首の本歌をあげている歌が1首、本説をあげている歌が2首ある。

4) 八代集の夢については拙稿「八代集に於ける夢の一考察」(『日本文化學報』23、韓國日本文化學會、2004.11)で考察した。

5) 鹿内和子「和歌における夢について 一万葉集～八代集一」(『女子大國文』63、京都女子大學國文學會、1971.10)

久保田淳「夢のうきはし 一新古今和歌集一」(『解釋と鑑賞』至文堂、1977.8)

今井正「古代和歌における『夢』 一万葉、古今、新古今を辿る一」(『宇部短期大學學術報告』14、宇部短大、1978.1)

渡辺裕美子「新古今和歌集の夢 一八代集の終結点として一」(『國文』お茶水女子大、1984.7)

## 2. 戀歌

『万葉集』の娘子が湯原王に贈った歌「我が背子がかく戀ふれこそぬばたまの夢に見えつつ寝ねえずけれ」(4-639)や、『古今集』の小町の歌「うたたねに戀しき人を見てしより夢てふ物は頼みそめてき」(戀2-553)のように、古來、夢は主に男女の情の世界を詠む戀歌の歌言葉であった<sup>6)</sup>。だが『新古今集』を代表する定家の歌「春の夜の夢のうき橋とだえして峰にわかる横雲の空」(春上-38)のように、『新古今集』では夢が情の世界を越えた美的な象徴としても詠まれるようになったため、戀歌の比率は『古今集』(76%)や『後撰集』(69%)ほど高くはない。しかし、それでも夢と戀とはやはり切り放せなかったようで、29首(全体の約35%)が戀歌として入集しており、そこにも幾つかの特徴が見い出せる。

第一に、戀歌には、逢瀬の夢を見た後の物思いを詠んだ歌が多く見られるという点である。例えば俊成女の歌「露はらふ寢覺めは秋のむかしにて見はてぬ夢にのこるおもかげ」(戀4-1326)は「涙の露を拂っている悲しい秋の寢覺めは、戀人に飽きられて悲しんだ昔の秋と変わらず、今しがた見果てずに覺めた夢に残っている戀人の面影よ」という意である。この歌について、日本古典文學全集(小學館)では2首の本歌をあげており、『古今集』の忠岑の歌「いのちにもまさりておしくある物は見はてぬ夢の覺むるなりけり」(戀2-609)と、『後撰集』のよみ人しらずの歌「涙河流す寢覺もある物を拂ふ許の露や何なり」(戀3-771)である。前者は戀人との逢瀬の夢を見終わらないうちに目覺めてしまった残念さを、後者は涙を河のように流して寢覺める侘しい心情を詠んでおり、何れも自身の心情を直接的に表現した歌である。だが俊成女の歌は「露はらふ寢覺めは秋」という客観的な描寫が、戀人に飽きられてしまった侘しさを表現しており、かつ「見はてぬ夢」が、はかなく消えた昔の戀を美的かつ象徴的に表現しており、2首の本歌とは大きな隔たりがあると言えよう。

逢瀬の夢を見た後の物思いを詠んだ歌としては、他にも實定の「さめてのち夢なりけりと思ふにも逢ふは名残のをしくやはあらぬ」(戀2-1125)や、實宗の「夢のうちに逢ふとみえつる寢覺めこそつれなきよりも袖はぬれけれ」(戀2-1127)などがある<sup>7)</sup>。實定の歌は「覺めた後、今は夢だったのだと知るにつけても、逢うということは何といても名残の惜しまれることだなあ」という意で、戀人に逢った後の甘美な名残惜しさは、現に逢っても夢で逢っても同じであることを指摘している。實宗の歌は「夢で戀人に逢った寢覺めは、現でその人に冷淡にされるよりも、いっそう袖が濡れることだ」という意で、現に恨めしくて流す涙よりも夢に見て流す涙のほうが多いとして、夢見後の悲しさを強調している。

第二に、夢の歌は戀1には1首もなく、戀3と戀5に多く詠まれているという点である。戀部の

6) 万葉集の夢の歌98首のうち、72首が相聞である。拙稿「『万葉集』に於ける夢の一考察」(『日本文化學報』17、韓國日本文化學會、2003.5)参照。

7) 他には、1380・1381・1382・1383・1384・1386・1387などがある。

配列は戀の進行に沿っており、よって夢の歌は戀としてはかなり進展した段階において詠まれたと言えよう。例えば俊成の歌「あはれなりうたたねにのみ見し夢の長き思ひにむすばほれなん」(戀5-1389)は、「あわれなことだ。

	戀1	戀2	戀3	戀4	戀5
古今	5	9	8	1	3
新古今	0	4	9	5	11

うたた寝に見た夢のような逢瀬が長く消えない思いとなって、心がふさがってしまうであろう」という意であり、かりそめの逢瀬後の長き悲哀を予感しての歌である。

しかも単に戀3と戀5に歌数が多いだけではなく、戀3の6首(1157~1162)や、戀5の10首(1380~1389)のように連続して入集しているという特徴があるが、そのような特徴は『古今集』には見られない。戀3の興風の歌(1157)から範永の歌(1162)までの6首は、逢瀬後の心情が詠まれた歌であるが、特に伊勢の歌(1159)から馬内侍(1161)の3首は、忍ぶ仲の戀を相手に口止めする歌となっている。例えば伊勢の歌「夢とても人にかたるな知るといへば手枕ならぬ枕だにせず」(戀3-1159)は、「たとえ夢で見たこととしても人に語ってくれるな、枕は秘密を知るので手枕以外は枕さえもしない」という意で、相手を思えば相手の夢の中に現れるという俗信に基づいており、伊勢は、夢に見たことを誰かに語れば戀が露見するおそれがあるので相手に口止めをしたのである。また戀5の赤染衛門の歌(1380)から俊成の歌(1389)までの10首は、逢瀬の夢から目覚めて余韻に浸ったり(1380、1381、1382、1383、1384、1386、1387)、逢瀬そのものを夢に喩えたりした歌(1385、1389)がずらりと並んでいる。例えば寂蓮法師の歌「涙河身もうきぬべき寝覚めかなはかなき夢のなごりばかりに」(戀5-1386)は、「激しく流れる涙河に身も浮いてしまいそうな寝覚めであるよ、はかない戀の夢の名残りだけで」という意で、作者は夢の逢瀬の激しく甘美的な余韻にしばし浸っているのである。能宣の歌「かくばかり寝であかしつる春の夜にいかに見えつる夢にかあるらん」(戀5-1385)は、「こうして眠らないで明かした春の夜にどうして見えた夢なのでしょう」という意で、「夢」は寝ずに明かした逢瀬の比喻であり、逢えた喜びを夢のようだと詠んでいるのである。

このように『新古今集』では戀の終末期や終了後における夢の歌が多く入首しており、それは「逢わぬ戀」や「忍ぶ戀」とい初期段階の歌が多かった『古今集』の夢とは大きく異なっている。即ち、まだ逢っていない人や忍ぶ仲の戀人との未来の逢瀬を願って詠んだ『古今集』の夢の歌とは異なり、『新古今集』には、逢瀬の後の心情を吐露したり、昔の逢瀬を振り返ったりするなど、過ぎ去った昔を回想して詠んだ歌が多いのである<sup>8)</sup>。そこには貴族社會の崩壊によって、現實逃避的、空想的になった時代精神からの影響が考えられよう。何故なら『新古今集』は現實世界に夢を見い出せなかつた貴族たちが、華やかだった王政への復古の夢を燃え上がらせていた頃に成立した作品だからである。

8) 渡辺裕美子氏は『新古今集』の夢は過去へ回歸する手段なのである」と述べている。(注5の前掲論文、p.72)

第三に、夢を見る人と見られる人との関係であるが、「自分が思うから相手の夢に自分が現れる」という発想の歌(1124、1159)、同じことを逆の視点から表現した「相手が思うから相手が自分の夢に現れる」という歌(1382)、そして「自分が思うから相手が自分の夢に現れる」という発想の歌(1387)の三つのパターンに分けることができる。一番目と二番目は思う人の魂が遊離して相手の夢の中に入り込んだと、三番目は自分の思いが相手の魂を夢の中に呼び込んだと理解できよう。例えば式子内親王の歌「夢にても見ゆらんものを歎きつつうちぬるよの袖のけしきは」(戀2-1124)は「夢の中でも見えていることであろうに。嘆いて寝る宵の涙に濡れた私の袖のようすは」という意で、自分の思いが相手に向に通じないことを嘆いているのである。これに對して、伊勢の歌「春の夜の夢にありつと見えつれば思ひたえにし人ぞ待たる」(戀5-1382)は「春の夜の夢に見えたので、あきらめてしまっていた人が待たれることだ」という意で、相手が夢に現れるのは相手が思っているからという俗信に基づき、伊勢は相手へのはかない希望をつないでいるのである。家隆の歌「逢ふと見てことぞともなく明けぬなりはかなの夢の忘がたみや」(戀5-1387)は、「思う人に逢うと見て、これということもなく夜が明けてしまった。はかない夢のあとの忘れられない記憶だけで」という意で、自分の思いゆえに夢を見、その夢から覺めて後、その夢を形見として懐かしむ心が詠まれている。

第四に「春の夜の夢」が多く詠まれているという点である。春の夜の夢は短くはかない逢瀬の喩えとして、また見た夢が實現することを期待して詠まれたが、八代集では『後撰集』に3首、『千載集』に2首入集しているが、『新古今集』には10首(38、106、112、790、1160、1177、1178、1382、1383、1385)も入集し、そのうち6首までが戀歌となっている。例えば、夢の内容が實現することを期待して詠まれた伊勢の歌(戀5-1382)や、盛明親王の歌「春の夜の夢のしるしはつらくとも見しばかりだにあらば頼まん」(戀5-1383)の2首は、夢の予告的機能にすぎず、戀情に執着する心が表現されている。これらは『後撰集』のよみ人しらずの歌「寝られぬをしひてわか寝る春の夜の夢をうつつになすよしも哉」(春中-76)で、春の夜の夢の實現が期待されているように、『後撰集』以來の伝統をそのまま受け継いでいると言える。それは伊勢も盛明親王も當代の歌人ではなく、『古今集』や『後撰集』時代の人だったことによると思われる。

また残りの4首(1160、1177、1178、1385)は何れも春の夜の夢が短くはかない逢瀬の比喩となっている。例えば和泉式部の歌「枕だに知らねばいはじ見しままに君かたるなよ春の夜の夢」(戀3-1160)は「枕さえも知らないのですから見たまに人に語らないでください。春の夜の夢のことを」という意で、春の夜のつかの間の逢瀬に酔いしれた心情が詠まれている。

なお「うたたねの夢」(1161、1380、1389)も、はかない逢瀬の比喩としてしばしば用いられた<sup>9)</sup>。例えば馬内侍の歌「忘れても人にかたるなうたたねの夢見てのちもながからじよを」(戀

9) 「うたた寝」は『拾遺集』「たらちねの親のいさめしうたた寝は物思時のわざにぞ有ける」(戀4-897)のように、本来してはならないものとされていたと思われる。

3-1161)は「忘れても人に語らないでください。うたた寝に見た夢のようなはかない逢瀬でしたが、いつまで続く仲ではないでしょうに」という意で、夢は逢瀬の比喩となっているが、その夢は「うたたね」に見えたものだから忽ちに覺めてしまうであろうと、戀の終りが予測されている。

### 3. 四季の歌

『古今集』以来、夢の歌は四季の部に少しずつ入集してきたが、『新古今集』になって急増したと言える。全部で18首あり、春4首・夏4首・秋5首・冬5首と、均衡して入集している。だが「春の夜の夢」が春の部以外に7首も入集したり<sup>10)</sup>、また俊成女の「露はらふ寝覺めは秋のむかしにて見はてぬ夢にのこるおもかげ」(戀4-1326)のように、秋の歌以外にも秋を背景とした歌が多く<sup>11)</sup>、夢は春や秋と強く結び付いていると言えよう。

先ず春の歌であるが、次の4首がある。

春の夜の夢のうき橋とだえて峰にわかる横雲の空 (春上-38、定家)  
いもやすく寝られざりけり春の夜は花のちるのみ夢に見えつつ (春下-106、凡河内躬恒)  
風かよふねざめの袖の花の香にかほる枕の春の夜の夢 (春下-112、俊成女)  
さくら花夢かうつつか白雲のたえてつねなき峰の春風 (春下-139、家隆)

定家の歌は『新古今集』の歌風である妖艶美を代表する歌で、戀人の無情を詠んだ忠岑の歌「風吹けば峰にわかる白雲の絶えてつれなき君が心か」(『古今集』戀2-601)を本歌としている。「夢のうき橋」は、夢を頼りない浮橋(舟の上に板をわたして作った橋)に喩えた句で、『源氏物語』の最後の巻名でもあり、定家は歌に物語の情緒をも取り込もうとしたのである。即ちこの句は、尼になってつながりの途切れた浮舟を思う薫の悲しみを連想させ、更には物語の結末にまで思いを馳せさせるものとなっているのである。また「横雲の空」は、春の夜の妖艶な夢の内容を暗示しており、定家は、春の夜の夢が途切れてしまった後も現の世界に完全に戻ったわけではなく、横雲が峰から分かれてゆく空を見つつ、なおも夢の余情に浸っているのである。

2番目の躬恒の歌は『亭子院歌合』(913年)で詠まれたもので、しきりに櫻花が散るさまが夢に見えてぐっすり寝られないという、櫻花に対する哀惜の情が表わされている。元來、屈折の多

10) 第2章で考察したように「春の夜の夢」は10首あり、そのうち春歌は3首(38、106、112)だけで、残りは哀傷歌1首(790)、戀歌6首(1160、1177、1178、1382、1383、1385)が収められている。

11) 他にも秋を背景とした歌として、戀歌(1388)、雑歌(1564、1565、1804)、哀傷歌(790、791、792)などがある。

い含蓄のある歌を残した躬恒であるが、この歌は単純で素朴な實感を詠んだ歌となっている<sup>12)</sup>。

3番目の俊成女の歌は、袖や枕に薫る櫻の香に春の夜に見た夢の余韻を感じて詠んだ歌である。櫻の花の香と春の夜の夢の甘美な余情とを融合させて、優艶な雰囲気醸し出している。

最後の家隆の歌は「夢か現か分からないが、櫻花とと思った白雲は消え去り、無常を誘う春風ばかり吹いている」という意であり、この歌は『古今集』の2首(戀2-601、雜下-942)<sup>13)</sup>を本歌としている。戀人の無情(601)や、世の中の無常(942)を詠んだ本歌の心を、夢現のうちに春風にはかなく散った櫻花の景を通して具体化していると言えよう。

このように春の夢の歌は、夢と現実が交錯する幻想的な意識の中で、『新古今集』獨特の甘美で妖艶な美的世界を表現しており、そのような世界を展開させるのには四季のうちで春が最適だったのであろう。

なお先に述べたように、戀歌の「春の夜の夢」は短くはかない逢瀬の比喻として、また夢の内容が實現することを期待して詠まれたが、春歌は、先の定家の歌(春上-38)や、俊成女の歌(春下-112)のように、夢と現、景物と心情が渾然一体となった境地が詠まれている。このような幻想的な美意識によってとらえられた春の夜の夢は、妖艶なはかなさの象徴となっており、戀歌の春の夜の夢とはかなり趣きが異なっている。

第二に夏の歌であるが、これも4首ある。

かへりこぬ昔をいまと思ひねの夢の枕にほふたちばな (夏-240、式子内親王)

たちばなのほふあたりのうたたねは夢も昔の袖の香ぞする (夏-245、俊成女)

窓ちかき竹の葉ささぶ風のをとにとみじかきうたたねの夢 (夏-256、式子内親王)

窓ちかきいささむら竹風ふけば秋におどろく夏の夜の夢 (夏-257、公継)

238番歌から247番歌にかけて懐旧の情を誘う「橘」が連続して詠み込まれているが、そのうち2首は、夢では昔の戀人に逢い、現では橘の香が漂うという内容の歌となっている。式子内親王の歌の「思ひねの夢」は、相手を思って寝ると夢に相手を見ることができるといふ古來の俗信に基づく表現で、『古今集』の小町の歌「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覺めざらましを」(戀2-552)や、躬恒の歌「君をのみ思ひ寝にねし夢なればわが心から見つるなりけり」(戀2-608)から生まれた表現と考えられており、『新古今集』にはこの1首だけがある<sup>14)</sup>。また俊成女の歌は、『古今集』(夏-139)や、『伊勢物語』(60段)の歌「五月まつ花橘の香をかげば昔の人

12) 窪田空穂『完本新古今和歌集評釋』上、東京堂出版、1964、p.131

13) 風吹けば峰にわかるる白雲の絶えてつれなき君が心か (忠岑、戀2-601)

世の中は夢かうつつかうつつも夢とも知らずありてなければ (小町、雜下-942)

14) 「思ひねの夢」は、他の八代集では『後撰集』に2首(戀3-766、戀4-872)、『千載集』に3首(春上-41、戀2-765、戀4-898)ある。

の袖の香ぞする」を本歌としている。この本歌は男の立場から詠まれた歌で、「昔の人」は女性であるのに對して、俊成女の歌は女の立場から詠まれた歌で、「昔の人」は男性と考えられる<sup>15)</sup>。しかも「夢も」の「も」が、夢と現の兩方にわたる昔の人の袖の香を示唆しており、夢と現が交錯した幻想的な歌となっている。

256番歌と257番歌は、何れも白居易の詩「風生竹夜、窓間臥。月照松時、台上行。」(『和漢朗詠集』夏夜)を本説としており、窓辺の竹の音で夢から覺めるという歌である。式子内親王の歌は、爽やかな風の音と、艶かしいうたた寝の夢とが對照的に詠まれており、公継の歌は『古今集』の敏行の歌「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」(秋上-169)を本歌としているが、本歌は單に聽覺的に秋の到來をとらえただけであるのに對して、敏行の歌は、更に夢から覺めたことで短い夏が過ぎさったことをも示している。

第三に秋の歌であるが、全部で5首あり、何れも夢から覺めた後の余韻が詠み込まれている。例えば慈円の歌「なく鹿の聲にめざめてしのぶかな見はてぬ夢の秋の思を」(秋下-445)は、鹿の鳴き聲に目が覺めて、見終わらなかつた夢の中の秋の悲しい思いを偲んでいるという意で、『古今集』の2首(秋上-214、戀2-609)を本歌としている。妻を戀して哀切に鳴く牡鹿の聲は夢の内容が悲しいものであったことを暗示している。また式子内親王の歌「ちたびうつ砧のをとに夢さめてものおもふ袖の露ぞくだる」(秋下-484)は、砧の音で夢から覺めて、物思いをしている袖の涙の露が碎け散るという意で、砧の音は夢にまで入り込み、目覺めた作者は袖にこぼれる涙が砧によって碎かれた露のようだと感じたのである。秋は夜長であり、鹿の聲や砧の音にも目覺めやすく、覺めた後にも長く侘しい夜が続く。その結果、秋の夢の歌に夢から覺めた後の物悲しい心情が詠まれるようになったのであろう。

最後に冬の歌であるが、全部で5首あり、何れも寒い夜の夢見後の侘しさが詠まれている。例えば有家の歌「夢かよふ道さへたえぬ吳竹のふしみの里の雪のしたをれ」(冬-673)は、伏見の里の吳竹が雪に下折れる音で現の道はもとより夢の通路さえも途絶えてしまったという意であり、夢から覺めた後の哀れな余韻が詠まれている。また良経の歌「かたしきの袖の氷もむすぼほれとけて寝ぬ夜の夢ぞみじかき」(冬-635)は、獨り寝の袖には涙の氷も結び、そのためにうち解けて寝ることもできず、長い冬の夜も夢ばかりは短いという意で、寒い冬の獨り寝の侘しさが優艶に詠まれている。

このように四季の歌は、自然に對する鋭敏な感覺を持った歌人たちによって折々の季節感に應じて繊細に詠まれた。しかも多くの歌は内に戀の情を含んでおり、四季の夢の歌は自然と人情を統一した幻想的な美的な象徴にまで昇華していると言えよう。

---

15) 久保田淳『新古今和歌集全評釋』2、講談社、1976、p.128



## 4. 雑歌

『拾遺集』の時代に成立した『堀河百首』には、雑20題の中に「夢」の題が設けられているが、八代集では『千載集』から雑部に夢の歌が急増した。『千載集』では、夢の歌は「世」を詠む歌と交互に配されて、いわゆる無常歌群(1121～1131)を構成しており、夢ははかないものの喩えとして、または現との分別のつかない境地として詠まれている。

『新古今集』の雑部には13首の夢の歌があるが、まずその特徴として、戀部の夢が過去と結び付いていたのと同様に、過去を偲ぶ歌が多く、現在の侘しい状況と華やかだった夢のような過去とが比較されることによって「無常」が表現されているという点があげられる。例えば、源通光の歌「浅茅生や袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢を吹く嵐かな」(雑上-1564)は「浅茅生よ、袖の涙の露はいつしか霜となり朽ちてしまった、忘れられないのは夢だけであるが、それも嵐が吹いて破ってしまった」という意で、忘れられない昔を夢に喩えている。

また俊成女の歌「葛の葉のうらみにかへる夢の世を忘れがたみの野への秋風」(雑上-1565)は「葛の葉が風に裏葉を見せて翻るように、思い出は恨みとなって返ってくる。夢のようなあの人の仲であるのに、夢を見させてはくれず、それを忘れたい昔の形見にせよとばかりに吹く野辺の秋風よ」という意で、「夢の世」ははかなく過ぎ去った昔を喩えている。本歌は平貞文の歌「あき風の吹き裏がへす葛の葉のうらみても猶うらめしき哉」(『古今集』戀5-823)で、自分の姿を「葛の葉」に、自分を捨てた男を「あき風」に見立てながら戀人を恨む情が詠まれている。俊成女は「夢の世」や「忘れがたみ」(「忘れ難み」と「忘れ形見」の掛詞)の投入によって、そのような本歌の恨みの情を哀艶な抒情にまで昇華させているのである。

公任の歌「ほどもなくさめぬる夢の中なれどそのよににたる花の色かな」(雑上-1584)は花山天皇が退位した翌年、花山院の東宮時代に宣旨として仕えた御形宣旨に贈った歌で、「さめぬる夢」は夢のように短かった花山天皇の在位(2年)を喩えており、その治世を懐かしんで詠んだ歌である。これに對して御形宣旨は「見し夢をいづれのよぞと思ふまにおりを忘れぬ花のかなしさ」(雑上-1585)という返歌を詠んだが、初句の「見し夢」は、花山天皇の退位、出家を喩えたものである。それは花山天皇が兼家・道兼父子の陰謀によって夢のように突然に退位・出家したからである。

このように雑歌の夢は華やかだった過去を回想した無常觀の漂う歌が多いが<sup>16)</sup>、それは斜陽の公家や貴族たちの間に後鳥羽院を中心とする王政復古の悲願が膨れ上がった時代、また『方丈記』にもあるように、安元の大火(1177年)、治承の辻風(1180年)、養和の饑饉(1181年)、元暦の大地震(1185年)など、相継ぐ天変地異が人々を末法思想(1052年)に染めた時代だったからであろう。

16) 他にも、1695・1771・1790番歌などがあげられる。

第二に、これは雑歌に限られたことではないが、「覺める夢」や「結ばぬ夢」が多く詠まれているという特徴がある<sup>17)</sup>。例えば、先に述べた源通光の歌(1564)や俊成女の歌(1565)、公任の歌(1584)などは「覺める夢」であるが、他にも慈円の歌「須磨の關夢をとおさぬ浪のをとを思ひもよらで宿をかりける」(雑中-1600)がある。浪の音が耳について旅寝の夢を結ぶことができないのであり、浪の音を擬人化して意地の悪い關守に見立てている。ところが、瀧の音や松の嵐に慣れた隱者の生活を髣髴とさせる家隆の歌「瀧のをと松の嵐もなれぬればうち寝るほどの夢は見せけり」(雑中-1624)のように、瀧の音も慣れてしまえば短い夢は見ることができたようである。

第三に、釋教歌ともいえるような仏教的な歌が入集しているという点である。例えば、崇徳院の歌「うたたねはおぎ吹く風におどろけど長き夢路ぞさむる時なき」(雑下-1804)の「長き夢路」は、仏教でいう「生死長夜」<sup>18)</sup>のことで、生死の煩惱の闇に迷って悟ることができない状態をいう。うたたねの夢の覺めやすさと、長夜の夢の覺めがたさとが對比されており、仏教で説く悟りの境地を慕っていた崇徳院は、荻の風音で目覺めた折に、悟りの容易でないことを感じて嘆いたのである。

また西行の歌「末の世もこのなさけのみ変らずと見し夢なくはよそに聞かまし」(雑下-1844)は「末法の世界でも和歌の風雅の道だけは変わらないという夢告がなかったら、あなたの勸進もとりあわなかったことでしょう」という意であるが、詞書「寂蓮、人々勸めて百首歌よませ侍けるに、(中略)夢に、なにごとく衰へゆけど、この道こそ世の末に変らぬものはあれ、なをこの歌よむべきよし、別當湛快、三位俊成に申と見侍りて、(後略)」から、寂蓮の勸進を断わった西行は、熊野に參詣し、その別當の湛快が歌道の不滅を俊成に説く夢を見て、百首歌を急いで詠み送ったことがわかる。

1052年(永承7年)から末法に入ったという危機感は、藤原資房の『春記』や、僧皇円の『扶桑略記』からもうかがえるが、その後、天変地異が起き、破戒虚言や鬭争戦亂が相繼ぐという仏説に類似した社會現象が次々と派生し、末法への自覺が次第に深化していった。そのような無常觀や厭世觀が廣がった時代にあって、歌道の不滅を説いた湛快の夢告は、當時の歌人たちの願いを物語っているのであろう。

## 5. 哀傷歌

哀傷歌は部立としては中國『文選』に發しており、勅撰漢詩集『文華秀麗集』に継承された。『万葉集』の「挽歌」には、題詞や左注に「哀傷」の語が用いられている歌があり、現實の喪に關

17) 他にも、1804番歌があげられる。

18) 『唯識論』七「未得眞覺、恒處夢中。故仏説爲、生死長夜」

「長夜の夢」は慈円の歌(哀傷-833)でも詠まれている。

わる悲哀の感情を詠む歌となっている19)。『古今集』では喪に関わる悲哀の歌だけでなく、死に直面した際の感懐歌も含まれており20)、『拾遺集』では出家の際の感懐歌や、無常観を詠んだ釋教歌的なものも含まれるようになり21)、その後『後拾遺集』や『千載集』で喪に関わる歌だけに純化された。

『新古今集』には8首の哀傷歌があるが、そのうち6首までが比喩として詠まれた夢となっている。哀傷歌なので、やはり「死」の比喩としての夢が多く、3首(790・791・829)ある。

秋ふかき寢覺めにいかが思ひいづるはかなく見えし春の夜の夢(哀傷-790、信成の女)  
見し夢をわするる時はなけれども秋の寢覺めはげにぞかなしき(哀傷-791、源通親)  
見し夢にやがてまぎれぬわが身こそとはるけふもまつ悲しけれ(哀傷-829、良経)

790番歌は藤原信成の女が源通親に贈った甲問の歌で、父の源雅道が春に亡くなったので、その死を「春の夜の夢」に喩えたのである。先に述べたように、戀歌では「春の夜の夢」が短くはかない逢瀬の比喩として詠まれたが、ここでは死のはかなさが喩えられている。791番歌は源通親の返歌で、贈歌の心をそのまま受け入れて、父の死を夢に喩えつつ自身の悲しみを詠み返した。他の比喩の夢としては、亡き女の面影や思い出を喩えた歌(792、實家)や、妻を喪った夫の悲しみを喩えた歌(828、俊成)、「無明長夜の夢」即ち、長い生死の迷いの世界を喩えた歌(833、慈円)などがある。

戀歌では夢に現れる人は生きていた人であったが、哀傷歌では死者が夢に現れている。2首(811・824)あって、何れも夢に亡き一條天皇が現れた際に詠まれた歌である。

あふことも今はなきねの夢ならでいつかは君を又はみるべき(哀傷歌-811、上東門院)  
夜もすがら昔のことを見つるかなかたるやうつありし世や夢(哀傷歌-824、大江匡衡)

811番歌は中宮彰子の歌で、詞書に「一條院かくれ給ひにければ、その御事をのみ戀ひ歎き給て、夢にほの見え給ひければ」とあるように、戀い嘆きつつ寝入った夢に亡き一條天皇が現れた折に詠んだものである。夢から覺めた彰子は、もはや夢以外では天皇と逢うことができないことを嘆いて詠んだ。また824番歌は大江匡衡の歌で、『新古今集』には「題しらず」とあるが、『續詞花集』の詞書に「一條院かくれさせ給ひて、ほどへて、夢に見たてまつりて詠み侍りける」とあることから、一條天皇が崩御して、程なく夢に現れた折に詠んだ歌であることがわかる。匡衡は一條天皇の侍讀(天皇に漢籍を進講する職)を勤めた漢學者であったが、夜通し天皇と語りあ

19) 例えば、巻2-165の題詞には「移葬大津皇子屍於葛城二上山之時、大來皇女哀傷御作歌二首」とある。

20) 巻16の858番歌から862番歌までが死に直面した時の感懐歌である。

21) 例えば慶滋保胤の歌(巻20-1330)は出家する際に詠んだもので、道信の歌(巻20-1238)は無常の世を詠んだものである。

った夢から覺め、「かたるやうつありし世や夢」と、天皇と語りあった先程の夢が現實なのか、それとも天皇在世中の昔が現實なのかと、目覺めた直後の感覺を詠んだのである。

死者の体から離れた魂が、死の瞬間から次の生を受けるまで流浪している時空を仏教用語では「中有」と言うが、「物の怪や夢に出現する男や女たちは、つまるところ<中有>をさすらう存在だというのが」<sup>22)</sup>當時の一般的な考えであったところからして、成仏できずに中有を漂泊していた一條天皇の魂が、亡き天皇を慕い續ける彰子や匡衡の心に引き寄せられて夢に現れたという解釋も可能であろう。當時は仏教の浸透につれて神道が異教となりかけていた時期であり、仏事を離れた生活の多かった皇族たちは反仏教的な罪を知らず知らずのうちに犯していたと言えよう<sup>23)</sup>。よって一條天皇もそのような反仏教的な罪によって中有をさまよっていたのだろうか。

## 6. 釋教歌・神祇歌

釋教歌は『千載集』において部立として初めて獨立したか<sup>24)</sup>、そこでは煩惱の迷いが夢に喩えられた。夢は覺めるものという認識のもとに、煩惱の夢から覺めることのない愚かしさを嘆いたり(1235)、夢のような迷いから解脫した悟りの境地が詠まれたのである(1223)。平安末期は保元・平治の亂など相次ぐ戦亂に人々は無常を痛感し、仏道への關心が高まった。そして「歌會や歌合の席でも法華經はいうまでもなく、淨土三部經、華嚴經、般若心經、維摩經などの經文の一節も題として歌を詠むことなどが流行した」<sup>25)</sup>。『千載集』において釋教歌が部立として成立したのはこのような時代背景によるものである。

『新古今集』では先にのべたように、雜歌の夢のなかに釋教歌ともいえるような仏教的な歌が一部みられたが、釋教歌としては次の3首の歌がある。何れも經典の趣旨を詠んだ歌である。

わかれにしその面影のこひしきに夢にも見えよ山のはの月 (釋教-1960、寂然法師)

しづかなるあか月ごとに見わたせばまだ深き夜の夢ぞかなしき (釋教-1969、式子内親王)

夢や夢うつつや夢とわかぬかないかなる世にかさめんとすらん (釋教-1972、赤染衛門)

22) 高橋享『源氏物語の對位法』東京大學出版會、1982、p.92

23) 例えば『源氏物語』では、光源氏の夢に現れた故桐壺院が「我は位に在りし時、過つことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて」(全集2-p.219)と、在位中に知らず知らずのうちに罪を犯したと語っているし、六條御息所は「罪深き所に年経つるも、いみじう思して、尼になりたまひぬ」(全集2-p.300)と、娘の齋宮とともに仏教を忌む罪深い伊勢で過ごしたことを恐ろしく思っただけで出家した。

24) 八代集では、先ず『拾遺集』の「哀傷」に釋教歌が收められ、『後拾遺集』の「雜6」で「神祇」の次に「釋教」の小部立が設けられた。

25) 糸賀きみ江「千載和歌集の考察 -歌材「夢」の視点から-」(『講座平安文學論究』3、風間書房、1986)p.119

寂然法師の歌は、詞書の法文「心懷戀慕、渴仰於仏」<sup>26)</sup>の趣意を詠んだ歌で、入滅した仏を戀慕し渴仰する衆生の悲しみを、戀人を喪った人の心になぞらえて詠んでいる。式子内親王の歌は、詞書に「毎日晨朝入諸定の心を」<sup>27)</sup>とあるように、毎朝入定して六道を巡り、衆生の苦を除いて引導するという地藏菩薩の心で詠んだ歌である。「深き夜の夢」は煩惱の闇に閉ざされている夢のような迷いの生活であり、地藏菩薩は衆生がそのような迷妄の夢を見続けているのが悲しいのである。赤染衛門の歌は、詞書に「維摩經 十喩中に、此身如夢といへる心を」<sup>28)</sup>とあるように、『維摩經』十喩にある「此の身夢の如し」という句の趣意を詠んだ歌であり、夢と現実との區別もできず、迷いから覺めることができない凡夫の愚かさを素直に詠んでいる。

神祇歌は、先ず『後拾遺集』雜6に「神祇」という小部立が設けられ、次に『千載集』で部立として獨立したが、兩集とも夢の歌は全く見られず、『新古今集』において初めて夢の歌が入集した。

さめぬれば思ひあはせてねをぞなく心づくしの古の夢（神祇-1905、慈円）

いはしるの神はしるらんしるべせよたのむ憂き世の夢の行くすゑ（神祇-1910、よみ人しらず）

『新古今集』には上の2首が入集しているが、慈円の歌は、詞書に「北野によみたてまつりける」とあるように、菅原道眞を祀っている北野天神に奉納した歌で<sup>29)</sup>、「古の夢」は、菅原道眞が配流の地の筑紫で体験した夢のように悲しいことを指している。慈円は道眞の「心づくし」と、讒言のために苦勞している今の我が身とを思い合わせて、聲を立てて泣いたというのである。またよみ人しらずの歌は、詞書に「岩代王子に人々の名など書きつけさせて、しばし侍しに、拜殿の長押に書きつけて侍し歌」とあるように、岩代の神に祈願した歌である。「夢の行くすゑ」は夢のようにはかない身の行く末、即ち仏教で説いている「後世」のことであり、その道しるべを岩代の神に祈願したのは神仏習合思想を背景にしていると言えよう。

## 7. おわりに

定家と後鳥羽院、二人の強烈な個性のぶつかり合いによって誕生した『新古今集』は、衰亡

26) 『法華經』卷6・如來壽量品第16にある句で、衆生教化のために仏が仮の入滅をしたことを衆生が聞き、仏を戀慕して善根をうえるという文中の句である。

27) 『延命地藏菩薩經』に「毎日晨朝入於諸定、遊化六道、拔苦与樂」とある。

28) 『維摩經』十喩は、一切のものは因縁によって仮に生じた實體の無いものであることを、10の喩によって述べたものである。なお『赤染衛門集』(459)の詞書には「まぼろしのごとし」とある。

29) 久保田淳氏は「無實の罪を着せられたひとが、北野社にその無實なることを晴らしてくれるよう、歌によって訴えることは、少なくなかったらしい」として、藤原顯輔の例をあげている。（『新古今和歌集全評釋』8、講談社、1976、p.417）

していく貴族社會を追慕しつつ、王朝美の殘照を詠いあげた勅撰集である。歌風としては俊成が唱えた「幽玄」や、定家が唱えた「有心体」という余情美に代表される、華麗・優美・繊細・妖艷な虚構世界が生まれ、技法としては「本歌取り」が繊細な美意識の象徴的な表現を可能にした。79首の夢の歌も、特に戀歌や四季の歌などは、そのような「新古今調」の形成に少なからず貢献していると言えよう。

本稿では夢の歌の部立ごとの特徴や、そのような歌が詠まれた時代背景などについて考察したが、その結果、次のことが分かった。

まず戀歌については、逢瀬の後の心情を吐露した歌が多く、また「逢わぬ戀」や「忍ぶ戀」などの戀の初期段階における夢の歌が多かった『古今集』とは異なり、戀の終末期や終了後における夢の歌が多く入首しているということである。即ち、過ぎ去った昔の逢瀬を回想して詠んだ歌が多いのであり、そこには貴族社會の崩壊によって、現實逃避的、空想的になった時代精神からの影響が考えられる。また夢見と魂の遊離という観点からすれば、戀歌の夢は三つのパターンに分類できる。

次に四季の歌については、春歌では、「春の夜の夢」が多く詠まれており、夢と現實が交錯する幻想的な意識の中で、甘美で妖艷な美的世界が表現されているということである。夏歌では、懐旧の情を誘う「橘」が詠み込まれており、秋歌では、何れも夢から覺めた後の余韻が詠み込まれているということである。それは秋は夜長で目覺めやすく、覺めた後にも長く侘しい夜が続いたからであろう。冬歌では、寒い夜の夢見後の侘しさが詠まれている。四季の歌は、折々の季節感に応じて繊細に詠まれ、しかも多くの歌は内に戀の情を含んでおり、自然と人情を統一した幻想的な美的な象徴にまで昇華していると言えよう。

第三に雑部の歌については、戀歌の夢が過去と結び付いていたのと同様に、過去を偲ぶ歌が多いということである。現在の侘しい状況と華やかだった夢のような過去とが比較されることによって「無常」が表現されており、また釋教歌ともいえるような仏教的な歌も含まれている。

第四に哀傷歌であるが、比喻として詠まれた夢が多く、なかでも「死」を夢に喩えた歌が多いということである。また戀歌では夢に現れる人は生きている人であったが、哀傷歌では死者が夢に現れており、成仏できずに中有を漂泊していた魂が、戀慕の情に引き寄せられて夢に現れたと解釋できる。

最後に釋教歌と神祇歌であるが、釋教歌の夢は何れも經典の趣旨を詠んだ歌であり、神祇歌の夢には仏教思想を詠んだ歌もあり、當時の神仏習合思想の影響がうかがえるということである。

本稿では、部立を中心として考察をすすめたため、慈円や俊成女、式子内親王や家隆など、夢を多く詠んだ歌人についての個別的な考察はできなかった。それは今後の課題としたい。

## 【参考文献】

- ・窪田空穂(1964)『完本新古今和歌集評釋』上・下、東京堂出版
- ・日本古典文學全集(1974)『新古今和歌集』小學館
- ・久保田淳(1976)『新古今和歌集全評釋』1～9、講談社
- ・新潮日本古典集成(1979)『新古今和歌集』新潮社
- ・新日本古典文學大系(1992)『新古今和歌集』岩波書店
- ・新編日本古典文學全集(1995)『新古今和歌集』小學館
- ・鹿内和子(1971.10)「和歌における夢について-万葉集～八代集-」(『女子大國文』63、京都女子大學國文學會)
- ・西郷信綱(1972)『古代人と夢』平凡社
- ・江口孝夫(1974)『夢と日本古典文學』笠間書院
- ・久保田淳(1977.8)「夢のうきはし -新古今和歌集-」(『解釋と鑑賞』至文堂)
- ・佐藤泰正編(1978)『文學における夢』笠間書院
- ・今井正(1978.1)「古代和歌における『夢』-万葉、古今、新古今を辿る-」(『宇部短期大學學術報告』14、宇部短大)
- ・高橋享(1982)『源氏物語の對位法』東京大學出版會
- ・渡辺裕美子(1984.7)「新古今和歌集の夢-八代集の終結点として-」(『國文』お茶水女子大)
- ・糸賀きみ江(1986)「千載和歌集の考察-歌材「夢」の視点から-」(『講座平安文學論究』3、風間書房)
- ・江口孝夫(1987)『日本古典文學 夢についての研究』風間書房
- ・河東仁(2002)『日本人の夢信仰』玉川大學出版部

## 要 旨

本稿は『新古今集』の夢の歌について、部立ごとの特徴や、歌が詠まれた時代背景を考察したもので、「幽玄」や「有心体」に代表される、華麗・優美・繊細・妖艶な「新古今調」の形成に、夢の歌が少なからず貢献していることを明らかにした。

先ず戀歌には、逢瀬の後の心情を吐露した歌が多く、また戀の終末期や終了後における夢の歌が多く入首している。即ち、過ぎ去った昔の逢瀬を回想して詠んだ歌が多いのであり、そこには貴族社会の崩壊によって、現實逃避的、空想的になった時代精神からの影響が考えられる。

次に四季の歌では、春歌は「春の夜の夢」が多く詠まれており、夢と現實が交錯する幻想的な意識の中で、甘美で妖艶な美的世界が表現されている。夏歌は懐旧の情を誘う「橘」が詠み込まれており、秋歌は何れも夢から覺めた後の余韻が詠み込まれている。秋は夜長で目覺めやすく、覺めた後にも長く侘しい夜が続いたからであろう。冬歌は寒い夜の夢見後の侘しさが詠まれている。四季の歌は、折々の季節感に応じて繊細に詠まれ、しかも多くの歌は内に戀の情を含んでおり、自然と人情を統一した幻想的な美的な象徴にまで昇華していると言えよう。

第三に雑部の歌には、戀歌の夢と同様に過去を偲ぶ歌が多い。現在の侘しい状況と華やかだった夢のような過去とが比較されることによって「無常」が表現されており、また釋教歌ともいえるような仏教的な歌も含まれている。

第四に哀傷歌には、比喻として詠まれた夢が多く、なかでも「死」を夢に喩えた歌が多い。また戀歌では夢に現れる人は生きている人であったが、哀傷歌では死者が夢に現れており、成仏できずに中有を漂泊していた魂が、戀慕の情に引き寄せられて夢に現れたと解釋できる。

最後に釋教歌と神祇歌であるが、釋教歌の夢は何れも經典の趣旨を詠んだ歌であり、神祇歌の夢には仏教思想を詠んだ歌もあり、當時の神仏習合思想の影響がうかがえる。

キーワード：逢瀬 遊離魂 妖艶 象徴 比喻 無常 中有 神仏習合

투 고 : 2005. 8. 31  
1차 심사 : 2005. 9. 10  
2차 심사 : 2005. 10. 1

住 所 : (336-708) 충남 아산시 탕정면 선문대학교 일어일본학과  
電 話 : 041-530-2427(연구실)/016-448-2857  
e-mail : mula@sunmoon.ac.kr